静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要　№13 p.87～98 (2007)

〈論文〉

大学生の柔道に対する意識の研究（4）

A Study of the Consciousness Structure concerning Judo in a Sample of University Students －Part4

田中秀幸*・窪田辰政**
Hideyuki TANAKA and Tatsumasa KUBOTA

(平成18年10月31日受理)

Ⅰ．緒言

講道館柔道は，柔術を学んだ嘉納治五郎がその技に工夫検討を加え明治15年（1882年）に創設したものである。人を傷つけたり殺したりする戦いを目的とした技の習得ではなく，稽古によって得られる強い精神と身体を活かし，社会に貢献することがこれからの平和な時代には必要であるとした嘉納の理想は，その名称も人が人生において歩むべき道，人としての生き方という意味で柔道とした。そして明治維新の新しい時代の中に広まっていった。以来，柔道は多くの愛好者の情熱と努力によって普及発展をとげ，今日ではオリンピック正式競技種目として，また世界選手権や国際大会等が世界各地で開かれ，現在では195ヵ国が国際柔道連盟に加盟し親しまれている。世界のスポーツとして男子とともに女子の大会も充実し，年々盛んになってきている現状である。

このように多くの人々の努力によって，柔道の量的な面での普及発展を成し遂げられた今，次はその質的な面での充実を図ることに目を向けるべきであろう。その一つとして，近年の勝利志向に見られるように，試合に勝つことを第一として人の気持ちを思い遣らない指導が見受けられることは，同じ道を歩む者として残念に思う。柔道修行の基本である「己を完成し，世を補益する」の精神を再確認し，１人でも多くの仲間を増やすための努力をしなければならない。

このような現状を鑑み，平成13年度より講道館と全日本柔道連盟が共催で，人としてのあり方，生き方など嘉納の理想とした人間形成を目指そうと「柔道ルネッサンス」運動を提唱した。嘉納の基本精神に立ち返り，「精力善用，自他共栄」の理想の実現に向けて力を合わせようと現在もこの運動は進められ，全国的な大会などにおいて関係者により観衆に紹介されている。

現代社会は国際化，情報化，少子高齢化などを受けて価値観や生活様式が多様となり，これらが幼児，児童，生徒や家族，そして地域社会まで大きな影響を及ぼしている。その中の学校教育における問題として，いじめや暴力，不登校などの諸問題が新聞紙上をはじめ，マスメディアを通して数多く取り上げられている。柔道のもつ教育的，体育的，道徳的特性はこれらの諸問題に有効に作用すると思われ，その効果を見守り，青少年の諸問題の解決に向けて少し

＊静岡大学　＊＊静岡産業大学

でも貢献できればと思っている。

筆者らは日頃保健体育科目の授業を通して，大学生の心身の健康保持・増進，将来の社会人としての素養，スポーツ文化の理解と継承などを目標として指導を展開しているが，実際の指導にあたり，彼らの柔道に対する意識を十分理解し，把握しておくことが指導上大切であると考え，1985年以来，大学生[1-5]，女子短大生[6]，高校生[7]，中学生[8-10]などを対象に意識の研究を進めてきた。

しかしながら，これまでの研究は対象者の調査時の意識構造の実態を明らかにした横断的調査であった。今後，より良い指導を進めていく上で，柔道授業が受講生の柔道を行っている人に対する意識構造にどのような影響を及ぼすか，縦断的調査を試みその実態を明らかにすることは，意義があるものと考えられる。本研究は本学１年生を対象に，授業受講前後の柔道を行っている人に対する意識構造の実態を明らかにし，今後より良い指導を進めていく上で有益な基礎資料を得ることを目的とする。

Ⅱ．方法

（１）調査対象および調査期間

調査対象は筆者らの基本体育学（柔道）の授業を履修した教育学部および人文学部の１年生で，授業前（94名），授業後（80名）であった。年齢は18歳から21歳，平均年齢はそれぞれ18.17歳，18.95歳であった。調査期間は平成17年４月中旬および平成18年１月下旬の２回である。

（２）調査方法

調査の実施にあたり，質問紙の配布は筆者らが行い，担当授業の時間に実施し，その場で回収した（集合調査法)。授業受講前後のそれぞれで質問紙に回答させ，回収された質問紙に不備，あるいは回答態度に不真面目さの伺えるものを除き有効データとした。

（３）授業概要

（授業の目標）

これまで筆者らは大学生，短大生，高校生，中学生らを対象に柔道に対する意識構造の実態を明らかにするために柔道部員と一般学生，運動経験の有無，男女，柔道に対する好き嫌いなどの観点から研究を進めてきた。しかしながら，これまでの研究はその対象者の調査時の意識構造の実態を明らかにした横断的調査であった。我々は授業を通して学生に柔道の持つ教育的，文化的，体育的特性などを十分理解させ，そして得られたものを彼らの将来の日常生活に応用させ，社会に貢献して欲しいとの目標のもとに平素指導に当たっている。

（授業の概要）

筆者らの担当授業「基本体育学」は通年２単位の必修科目であり，年間30週開講予定で，５～６週の講義を含む実技中心の授業である。前期は講道館護身術，後期は柔道を行うが，初心者が多いため基本から指導している。講義は共通のテーマである健康と運動を中心とし，体力保持の必要性とその方法，生涯スポーツの意義とその実践などである。そして平素の実技では柔道授業特有のものとして，我が国の伝統的な運動文化である武道を理解し体験することは，これからの国際化社会の中で生きる日本人として意義深いものであることを学習する。また人

間形成を目指す教育として，精神的な面を尊重する考え方が重視され，自己制御，相手を尊重する態度，思いやりが大切にされている。このような事柄を話し，学生への素養を高めるように努めている。

以下に授業の概要，ならびに指導内容について述べる。数字は週を示す。

(授業計画と指導内容)

1　　ガイダンス
2～5　護身術　組み付かれた場合
6～8　護身術　離れた場合
9～13　護身術　武器の部1，2，3
14～15　講義　スポーツと健康（現代社会における運動の必要性を理解し，日常生活の中に運動を取り入れる習慣を身に付ける。）
16～18　柔道　歴史，礼法，受け身，基本動作等
19～21　柔道　抑え技の基本，受け身，固め技，投げ技等
22～23　講義　トレーニング理論（体力トレーニングの諸原則と各種トレーニングの正しいやり方を理解し，個人に応じた実践を行う）
24～26　柔道　固め技，投げ技，乱取り等
27～28　講義　姿勢と健康（毎日の生活の中に見られるいろいろな姿勢，特に基本となる直立姿勢に着目し，良い姿勢，正しい姿勢の必要性を健康との関わりから理解し，その姿勢を保持するための方法を実践し快適な生活を過ごす。）

2～13は護身術の技について解説し実技として行う。護身術は正式には講道館護身術と称して7つある講道館柔道の形の一つである。古来より行われている形を実践することにより，その技を体験し継承することに意義があり，我が国の伝統を理解させるという意図があり，国際社会における日本人として我が国の伝統を尊重し誇りとするようその育成を目指す。

16～21では講道館柔道の歴史，礼法，受け身，各技について解説し実技として実践する。歴史では柔道の発祥から今日までの過程を述べ，創始者嘉納治五郎および多くの人々の情熱と貢献によって今日の隆盛を見たこと。嘉納の理想は，技の修練を繰り返すことにより体育的（身体性），競技的，精神的（情緒性）な面を重視し，最終的には人間形成を目指し社会に貢献することとした。自己抑制，相手を尊重する態度および思いやりなどを理解させることに努めた。

（4）質問紙の構成

質問紙は表1に示すように講道館柔道科学研究会，普及と対策班（代表　松本芳三）作成のものを用いた。質問項目及び各下位因子の分類にあたっては，松本ら[11]の「各国柔道の実態調査」，花田ら[12]の「スポーツマン的性格」，尾形の「柔道に対する意識の研究（第1報）」[13-14]等の文献よりスポーツマンの特性ならびにスポーツマンとして要求される項目を収集し，2回の予備調査の結果をもとに項目分析を行い，10人のスタッフにより質問項目は作成された。質問項目は社会性，意志性，活動性，身体性，情緒性の5つのカテゴリーに分類されており，次のような項目で構成されている。

社会性……（1）指導性がある，（6）正義感がある，（11）礼儀正しい，（16）誠実である，（21）公正である，（26）社交性がある，（31）規則を守る，（35）協同的である，の8項目。

意志性……（2）責任感が強い，（7）勇気がある，(12) 決断力がある，(17) 忍耐力がある，(22) 努力家である，(27) 自主性がある，(32) 意志が強い，の７項目。
活動性……（3）慎重である，（8）集中力がある，(13) ものごとを正確に行う，(18) 活動的である，(23) 積極的である，(28) 闘争的である，(33) 実践的である，の７項目。
身体性……（4）からだに自信をもっている，（9）体力的に持久力がある，(14) 安全感がある，(19) 健康的である，(24) 精力的である，(29) 動作が機敏である，(34) 節制心がある，の７項目。
情緒性……（5）情緒が安定している，(10) ものごとにこだわらない，(15) 落ちつきがある，(20) 素直である，(25) 明朗である，(30) 楽天的であるの６項目，計35項目であり，質問紙ではそれらの項目はランダムに配置され，それぞれの項目について５段階評価尺度法により調査が行われた。

（5）分析方法

本研究では，柔道を行っている人に対する意識の構造を統計学的立場から推定するために，因子分析を用いた。同一の受講生に対し，授業受講前後に回収された質問紙を授業受講前と授業受講後の２群に分け「もっとも強く感じる （５点)」「かなり強く感じる（４点)」「普通（３点)」「あまり感じない（２点)」「まったく感じない （１点)」として調査内容を得点化し，各評価について計算されたそれぞれの相関行列（35×35）に主因子法を施し，固有値が1.0以上の主成分について，ノーマル・バリマックス（normal varimax）基準による直交回転を適用し多因子解（multiple factor solution）を求めた。さらに，授業受講前後に抽出された各因子の類似性を検討するためPearsonの積率相関係数を算出した。

表1　質問紙

（年齢　　満　　歳）　　（性別　　男　・女）　　（運動部所属　　有　・無）

あなたは柔道を行っている人に対してどんなイメージを持っていますか。あなたの答えにあてはまる番号を○でかこんでください。この場合できるだけ第一印象で答えてください。

柔道を行っている人は	もっとも強く感じる		かなり強く感じる		普通		あまり感じない		まったく感じない
1 指導性がある・・・・・・・・・	5	—	4	—	3	—	2	—	1
2 責任感が強い・・・・・・・・・	5	—	4	—	3	—	2	—	1
3 慎重である・・・・・・・・・・	5	—	4	—	3	—	2	—	1
4 からだに自信をもっている・・・	5	—	4	—	3	—	2	—	1
5 情緒が安定している・・・・・・	5	—	4	—	3	—	2	—	1
6 正義感がある・・・・・・・・・	5	—	4	—	3	—	2	—	1
7 勇気がある・・・・・・・・・・	5	—	4	—	3	—	2	—	1
8 集中力がある・・・・・・・・・	5	—	4	—	3	—	2	—	1
9 体力的に持久力がある・・・・・	5	—	4	—	3	—	2	—	1
10 ものごとにこだわらない・・・・	5	—	4	—	3	—	2	—	1
11 礼儀正しい・・・・・・・・・・	5	—	4	—	3	—	2	—	1
12 決断力がある・・・・・・・・・	5	—	4	—	3	—	2	—	1
13 ものごとを正確に行う・・・・・	5	—	4	—	3	—	2	—	1
14 安全感がある・・・・・・・・・	5	—	4	—	3	—	2	—	1
15 落ちつきがある・・・・・・・・	5	—	4	—	3	—	2	—	1
16 誠実である・・・・・・・・・・	5	—	4	—	3	—	2	—	1
17 忍耐力がある・・・・・・・・・	5	—	4	—	3	—	2	—	1
18 活動的である・・・・・・・・・	5	—	4	—	3	—	2	—	1
19 健康的である・・・・・・・・・	5	—	4	—	3	—	2	—	1
20 素直である・・・・・・・・・・	5	—	4	—	3	—	2	—	1
21 公正である・・・・・・・・・・	5	—	4	—	3	—	2	—	1
22 努力家である・・・・・・・・・	5	—	4	—	3	—	2	—	1
23 積極的である・・・・・・・・・	5	—	4	—	3	—	2	—	1
24 精力的である・・・・・・・・・	5	—	4	—	3	—	2	—	1
25 明朗である・・・・・・・・・・	5	—	4	—	3	—	2	—	1
26 社交性がある・・・・・・・・・	5	—	4	—	3	—	2	—	1
27 自主性がある・・・・・・・・・	5	—	4	—	3	—	2	—	1
28 闘争的である・・・・・・・・・	5	—	4	—	3	—	2	—	1
29 動作が機敏である・・・・・・・	5	—	4	—	3	—	2	—	1
30 楽天的である・・・・・・・・・	5	—	4	—	3	—	2	—	1
31 規則を守る・・・・・・・・・・	5	—	4	—	3	—	2	—	1
32 意志が強い・・・・・・・・・・	5	—	4	—	3	—	2	—	1
33 実践的である・・・・・・・・・	5	—	4	—	3	—	2	—	1
34 節制心がある・・・・・・・・・	5	—	4	—	3	—	2	—	1
35 協同的である・・・・・・・・・	5	—	4	—	3	—	2	—	1

Ⅲ．結果および考察

（1）授業受講前の学生からみた柔道を行っている人に対する意識の構造

授業受講前の生徒94名についてⅡ.方法　（3）　からの推定の結果，表2の抽出された回転後の因子負荷行列にみられるように6因子が抽出され，第1因子から第6因子までの全分散に対する累積貢献度は46.670%であった。ここでは因子負荷量が0.4以上を有意と定め，因子解釈のための最低基準とした。

表2　回転後の因子負荷行列　(授業受講前　N=94)

	1	2	3	4	5	6	共通性
1	0.496				0.527		0.644
2					0.715		0.668
3							0.776
4						0.687	0.813
5			0.424				0.663
6		0.520					0.826
7					0.431	0.574	0.752
8					0.424		0.793
9				0.622			0.551
10	0.460						0.720
11		0.427	0.426				0.627
12					0.490		0.686
13			0.527				0.763
14			0.641				0.769
15			0.651				0.729
16		0.552					0.687
17				0.468			0.756
18				0.530			0.789
19				0.498			0.636
20		0.553					0.620
21		0.626					0.682
22		0.606					0.721
23	0.630						0.770
24				0.411			0.674
25	0.765						0.807
26	0.704						0.705
27		0.543					0.659
28						0.445	0.609
29							0.749
30	0.573						0.754
31							0.702
32		0.474					0.693
33						0.529	0.677
34			0.620				0.827
35				0.438			0.745
貢献量	3.470	3.177	2.865	2.422	2.404	1.994	16.332
貢献度（%）	9.910	9.080	8.190	6.920	6.870	5.700	46.670
累積貢献度（%）	9.910	18.990	27.180	34.100	40.970	46.670	

第1因子

第1因子の全分散に対する貢献度は9.910%であり，因子負荷量が0.4以上の項目を因子負荷量の高いものから順に列挙すると（25）明朗である（0.765），（26）社交性がある（0.704），（23）積極的である（0.630），（30）楽天的である（0.573），（1）指導性がある（0.496），

(10) ものごとにこだわらない (0.460) の６項目が抽出された。(25), (30), (10) は情緒性, (26), (23) は活動性, (１) は社会性に関する項目であることから,「明朗で社交性に富んだ情緒性因子」と解釈した。

第２因子

第２因子の貢献度は9.080%であり, 有意な項目を列挙すると (21) 公正である (0.626), (22) 努力家である (0.606), (20) 素直である (0.553), (16) 誠実がある (0.552), (27) 自主性がある (0.543), (６) 正義感がある (0.520), (32) 意志が強い (0.474), (11) 礼儀正しい (0.427) の８項目が抽出された。(21), (16), (６), (11) は社会性, (22) は意志性, (20) は情緒性, (27), (32) は意志性に関する項目であることから,「公正な社会性因子」と解釈した。

第３因子

第３因子の貢献度は8.190%であり, 有意な項目を列挙すると (15) 落ちつきがある (0.651), (14) 安全感がある (0.641), (34) 節制心がある (0.620), (13) ものごとを正確に行う (0.527), (11) 礼儀正しい (0.426), (５) 情緒が安定している (0.424) の６項目が抽出された。(15), (５) は情緒性, (14), (34) は身体性, (13) は活動性, (11) は社会性に関する項目であることから,「落ちつきがある情緒性因子」と解釈した。

第４因子

第４因子の貢献度は6.920%であり, 有意な項目を列挙すると (９) 体力的に持久力がある (0.622), (18) 活動的である (0.530), (19) 健康的である (0.498), (17) 忍耐力がある (0.468), (35) 協同的である (0.438), (24) 精力的である (0.411) の６項目が抽出された。(９), (19), (24) は身体性, (18) は活動性, (17) は意志性, (35) は社会性に関する項目であることから,「持久力のある活動的な身体性因子」と解釈した。

第５因子

第５因子の貢献度は6.870%であり, 有意な項目を列挙すると (２) 責任感が強い (0.715), (１) 指導性がある (0.527), (12) 決断力がある (0.490), (７) 勇気がある (0.431), (８) 集中力がある (0.424) の５項目が抽出された。(２), (12), (７) は意志性, (１) は社会性, (８) は活動性に関する項目であることから,「責任感が強い意志性因子」と解釈した。

第６因子

第６因子の貢献度は5.700%であり, 有意な項目を列挙すると (４) からだに自信をもっている (0.687), (７) 勇気がある (0.574), (33) 実践的である (0.529), (28) 闘争的である (0.445) の４項目が抽出された。(28) は活動性 (29) は身体性に関する項目であることから,「からだに自信のある身体性因子」と解釈した。

この結果, 授業受講前の柔道を行っている人に対する意識の構造は第１因子「明朗で社交性に富んだ情緒性因子」, 第２因子「公正な社会性因子」, 第３因子「落ちつきがある情緒性因子」, 第４因子「持久力のある活動的な身体性因子」, 第５因子「責任感が強い意志性因子」, 第６因子「からだに自信のある身体性因子」という因子から構成されていた。

(２) 授業受講後の学生からみた柔道を行っている人に対する意識の構造

授業受講後の生徒80名についてⅡ.方法 (３) からの推定の結果, 表３の抽出された回転後の因子負荷行列にみられるように５因子が抽出され, 第１因子から第５因子までの全分散に対

する累積貢献度は47.850%であった。ここでも表２と同様に因子負荷量が0.4以上を有意と定め，因子解釈のための最低基準とした。

表３　回転後の因子負荷行列　（授業受講後　N=80）

	1	2	3	4	5	共通性
1	0.437		0.457			0.433
2	0.703					0.561
3						0.199
4				0.529		0.332
5	0.547					0.344
6	0.699					0.623
7				0.613		0.543
8						0.491
9				0.465		0.353
10						0.427
11	0.560					0.438
12					0.454	0.512
13					0.636	0.570
14					0.549	0.324
15					0.531	0.580
16	0.628					0.532
17						0.480
18			0.419	0.533		0.489
19				0.569		0.472
20		0.489				0.476
21	0.513	0.502				0.556
22		0.545				0.503
23		0.539		0.439		0.657
24		0.594		0.467		0.693
25			0.656			0.572
26			0.806			0.701
27	0.428		0.411			0.453
28						0.195
29		0.703				0.520
30			0.577			0.436
31	0.561					0.550
32	0.508					0.392
33		0.626				0.533
34						0.391
35			0.582			0.422
貢献量	4.669	3.618	3.571	2.825	2.067	16.700
貢献度（%）	13.340	10.340	10.200	8.070	5.900	47.850
累積貢献度（%）	13.340	23.680	33.880	41.950	47.850	

第１因子

第１因子の全分散に対する貢献度は13.340%であり，因子負荷量が0.4以上の項目を因子負荷量の高いものから順に列挙すると（２）責任感が強い（0.703），（６）正義感がある（0.699），（16）誠実である（0.629），（31）規則を守る（0.561），（11）正義正しい（0.560），（５）情緒が安定している（0.547），（21）公正である（0.513），（32）意志が強い（0.508），（１）指導性がある（0.437），（27）自主性がある（0.428）の10項目が抽出された。（２），（32），（27）は意志性，（６），（16），（31），（11），（21），（１）は社会性，（５）は情緒性に関する項目であることから，「責任感の見られる社会性因子」と解釈した。

第２因子

第２因子の貢献度は10.340%であり，有意な項目を列挙すると（29）動作が機敏である（0.703），（33）実践的である（0.626），（24）精力的である（0.594），（23）積極的である（0.539），（22）努力家である（0.545），（21）公正である（0.502），（20）素直である（0.489）の７項目が抽出された。（29），（24）は身体性，（33），（23）は活動性，（22）は意志性，（21）は社会性，（20）は情緒性に関する項目であることから，「精力的，機敏に活動する身体性因子」と解釈した。

第３因子

第３因子の貢献度は10.200%であり，有意な項目を列挙すると（26）社交性がある（0.806），（25）明朗である（0.626），（35）協同的である（0.582），（30）楽天的である（0.577），（１）指導性がある（0.457），（18）活動的である（0.419），（27）自主性である（0.411）の７項目が抽出された。（26），（35），（１）は社会性，（25），（30）は情緒性，（18）は活動性，（27）は意志性に関する項目であることから，「自主性，社交性に富んだ情緒性因子」と解釈した。

第４因子

第４因子の貢献度は8.070%であり，有意な項目を列挙すると（７）勇気がある（0.613），（19）健康的である（0.569），（18）活動的である（0.533），（４）からだに自信をもっている（0.529），（24）精力的である（0.467），（９）体力的に持久力がある（0.465），（23）積極的である（0.439）の７項目が抽出された。（７）は意志性，（19），（４），（24），（９）は身体性，（18），（23）は活動性に関する項目であることから，「勇気のある活動的な身体性因子」と解釈した。

第５因子

第５因子の貢献度は5.900%であり，有意な項目を列挙すると（13）ものごとを正確に行う（0.636），（14）安全感がある（0.549），（15）落ちつきがある（0.531），（12）決断力がある（0.454）の４項目が抽出された。（13）は活動性，（14）は身体性，（15）は情緒性，（12）は意志性に関する項目であることから，「安全感，正確さに満ちた情緒性因子」と解釈した。

この結果，授業受講後の柔道を行っている人に対する意識の構造は第１因子「責任感の見られる社会性因子」，第２因子「精力的，機敏に活動する身体性因子」，第３因子「自主性，社交性に富んだ情緒性因子」，第４因子「勇気のある活動的な身体性因子」，第５因子［安全感，正確さに満ちた情緒性因子」という因子から構成されていた。

授業受講前の学生の柔道を行っている人に対する意識構造は６因子が，授業受講後は５因子が抽出された。このことは学生の柔道に対する意識が，より明確になったと推察される。

（3）授業受講前後の学生の柔道を行っている人に対する意識の類似性

授業受講前後にそれぞれ抽出された柔道意識尺度の下位因子の類似性を検討するためpearsonの積率相関係数を算出した。表４は授業受講前後の学生の柔道を行っている人に対する意識の類似性を示したものである。

表４　授業受講前後の因子構造の類似性

	授業前第１因子	授業後の第３因子	授業前第２因子	授業後の第１因子	授業前第３因子	授業後の第５因子	授業前第４因子	授業後の第４因子
社会性（質問項目１）	*0.496*	*0.457*	0.089	*0.437*	0.031	0.008	0.110	0.056
社会性（質問項目６）	0.127	0.025	*0.520*	*0.699*	0.324	0.070	0.067	0.359
社会性（質問項目11）	0.138	0.077	*0.427*	*0.560*	*0.426*	0.229	0.032	0.256
社会性（質問項目16）	0.069	0.025	*0.552*	*0.629*	0.279	0.305	0.080	0.164
社会性（質問項目21）	0.058	0.148	*0.626*	*0.513*	0.365	0.120	0.025	0.059
社会性（質問項目26）	*0.704*	0.806	0.015	0.040	0.151	0.066	0.106	0.115
社会性（質問項目31）	0.398	0.110	0.280	*0.561*	0.357	0.382	0.309	0.146
社会性（質問項目35）	0.322	*0.582*	0.152	0.234	0.297	0.034	*0.438*	0.114
意志性（質問項目２）	0.132	0.074	0.192	*0.703*	0.076	0.032	0.148	0.128
意志性（質問項目７）	0.106	0.009	0.251	0.348	0.110	0.173	0.324	*0.613*
意志性（質問項目12）	0.294	0.395	0.275	0.195	0.078	*0.454*	0.224	0.018
意志性（質問項目17）	0.283	0.136	0.329	0.161	0.127	0.369	*0.468*	0.389
意志性（質問項目22）	0.063	0.104	*0.606*	0.372	0.049	0.008	0.207	0.238
意志性（質問項目27）	0.231	*0.411*	*0.543*	*0.428*	0.188	0.064	0.085	0.050
意志性（質問項目32）	0.097	0.059	*0.474*	*0.508*	0.200	0.256	0.316	0.047
活動性（質問項目３）	0.011	0.013	0.071	0.246	0.234	0.265	0.088	0.119
活動性（質問項目８）	0.189	0.290	0.208	0.357	0.212	0.230	0.285	0.380
活動性（質問項目13）	0.114	0.219	0.263	0.287	*0.527*	*0.636*	0.064	0.020
活動性（質問項目18）	0.251	*0.419*	0.188	0.091	0.002	0.032	*0.530*	*0.533*
活動性（質問項目23）	*0.630*	0.308	0.279	0.281	0.159	0.001	0.321	*0.439*
活動性（質問項目28）	0.191	0.363	0.034	0.188	0.084	0.008	0.009	0.143
活動性（質問項目33）	0.219	0.253	0.268	0.264	0.228	0.026	0.166	0.083
身体性（質問項目４）	0.169	0.029	0.014	0.151	0.003	0.102	0.236	*0.529*
身体性（質問項目９）	0.060	0.035	0.042	0.151	0.035	0.090	*0.622*	*0.465*
身体性（質問項目14）	0.186	0.061	0.019	0.114	*0.641*	*0.549*	0.027	0.016
身体性（質問項目19）	0.140	0.286	0.182	0.242	0.150	0.043	*0.498*	*0.569*
身体性（質問項目24）	0.344	0.299	0.157	0.169	0.107	0.061	*0.411*	*0.467*
身体性（質問項目29）	0.201	0.026	0.071	0.077	0.006	0.133	0.352	0.025
身体性（質問項目34）	0.005	0.272	0.121	0.337	*0.620*	0.168	*0.044*	0.140
情緒性（質問項目５）	0.099	0.130	0.122	*0.547*	*0.424*	0.161	0.129	0.029
情緒性（質問項目10）	*0.460*	0.379	0.057	0.359	0.183	0.164	0.171	0.309
情緒性（質問項目15）	0.167	0.386	0.080	0.275	0.651	*0.531*	0.118	0.232
情緒性（質問項目20）	0.399	0.220	*0.553*	0.391	0.267	0.111	0.001	0.152
情緒性（質問項目25）	*0.765*	*0.656*	0.024	0.026	0.044	0.064	0.032	0.198
情緒性（質問項目30）	*0.573*	*0.577*	0.183	0.056	0.089	0.236	0.043	0.102
貢献度（%）	9.910	10.200	9.080	13.340	8.190	5.900	6.920	8.070
相関係数	0.823		0.622		0.590		0.561	

授業受講前の第１因子と授業受講後の第３因子（r=0.823，p<.01），授業受講前の第２因子と授業受講後の第１因子（r=0.622，p<.01），授業受講前の第３因子と授業受講後の第５因子（r=0.590，p<.01），授業受講前の第４因子と授業受講後の第４因子（r=0.561，p<.01）との間に有意な相関が認められた。しかしながら，それぞれ抽出された項目についてより詳細に検討したところ，授業前の因子と授業後の因子において，柔道意識尺度の５つの下位因子に同様の項目が見られたものの，異なる項目も見受けられた。授業受講前の第１因子には，活動性因

子の「積極的である」，情緒性因子の「ものごとにこだわらない」が，授業受講後の第３因子には，社会性因子の「協同的である」，意志性因子の「自主性がある」，活動性因子の「活動的である」が見られ，それぞれに異なる項目が認められた。授業前の第２因子には，意志性因子の「努力家である」，情緒性因子の「素直である」が，授業後の第１因子には，社会性因子の「指導性がある」と「規則を守る」，意志性因子の「責任感が強い」，情緒性因子の「情緒が安定している」が見られ，それぞれに異なる因子が認められた。授業前の第３因子には，社会性因子の「礼儀正しい」，身体性因子の「節制心がある」，情緒性因子の「情緒が安定している」が，授業後の第５因子には，意志性因子の「決断力がある」が見られ，それぞれに異なる項目が認められた。授業前の第４因子には，社会性因子の「協同的である」，意志性因子の「忍耐力がある」が，授業後の第４因子には，活動性因子の「活動的である」，身体性因子の「からだに自信をもっている」が見られ，それぞれに異なる項目が認められた。

これら授業受講前後の意識構造の違いには様々な影響要因が考えられるが，我が国の伝統的な運動文化である武道を理解させ，技の修練を繰り返し実践すると同時に，自己抑制や相手を尊重する態度といった人間形成にねらいを置いた授業展開は，受講生の柔道を行っている人に対する意識に何らかの影響を及ぼした可能性が考えられる。

本研究は，授業受講前後で学生の柔道を行っている人に対する意識構造にどのような違いが見られるか，その実態を明らかにするために因子分析的手法を用いて前後比較デザインによる質問紙調査を試みた。しかしながら，本研究ではコントロール群を設定していないため，授業受講前後の学生の意識構造の違いが，授業によってどの程度もたらされたものかを明らかにすることはできない。今後は，これらの問題を改善し，より詳細な知見を得るためにも，コントロール群の設定は必要不可欠であろう。これらの結果を考慮し，今後の授業，ならびに学生指導の一助として活かしていくことが認識された。

Ⅳ. 結論

本研究の目的は，講道館柔道科学研究会，普及と対策班（代表　松本芳三）作成の質問紙（35項目）を用いて，本学１年生を対象に，授業受講前後の柔道を行っている人に対する意識構造の実態を明らかにすることである。その結果，以下の点が明らかとなった。

1）授業受講前の学生の柔道を行っている人に対する意識構造は６因子が抽出されたが，授業受講後は５因子に集約された。このことは学生の柔道に対する意識が，より明確になったと推察された。

2）授業受講前後に抽出されたそれぞれの因子について類似性があるかを検討するためpearsonの積率相関係数を算出した結果，授業受講前の第１因子と授業受講後の第３因子，授業受講前の第２因子と授業受講後の第１因子，授業受講前の第３因子と授業受講後の第５因子，授業受講前の第４因子と授業受講後の第４因子との間に有意な相関が認められた。

これらの結果から，筆者らの担当した週１回の１年間にわたる柔道授業は，受講生の柔道を行っている人に対する意識に何らかの影響を及ぼした可能性が考えられる。しかしながら，本研究ではコントロール群を設定していないため，授業受講前後の学生の意識構造の違いが，授業によってどの程度もたらされたものかを明らかにすることはできない。今後は，より詳細な知見を得るためにも，コントロール群を設定し，研究することが望まれる。

引用文献

1）田中秀幸，飯田顕男：本学学生の柔道に対する意識の研究，静岡大学教養部研究報告，第21巻，37-55，1985.

2）田中秀幸，中村良三，堀安高綾，大滝忠也，尾形敬史，村田直樹，辻原謙太郎，猪熊　真，川村禎三，野瀬清喜，松井　勲：大学生の柔道に対する意識の研究，講道館柔道科学研究会紀要，第7輯，173-193，1994.

3）田中秀幸，岡田修一，小澤雄二，井浦吉彦，長谷川繁夫，児島眞平，奥村浩士，岡本啓：大学柔道部員の柔道に対する意識の研究，講道館柔道科学研究会紀要，第8輯，109-122，1999.

4）田中秀幸，窪田辰政，大石哲夫：大学生の柔道に対する意識の研究（2），静岡大学教育学部研究報告教科教育学篇，第34号，117-128，2003.

5）窪田辰政，田中秀幸，村上　繁：大学生の柔道に対する意識の研究（3），杏林大学研究報告教養部門，第21巻，137-148，2004.

6）田中秀幸，大石孝三：女子短大生の柔道に対する意識の研究，静岡大学教養部研究報告，第27巻，41-60，1991.

7）田中秀幸，水嶋武雄：高校生の柔道に対する意識の研究，静岡大学教養部研究報告，第25巻，33-51，1989.

8）田中秀幸，窪田辰政，渡瀬益章，山本　章：中学生の柔道に対する意識の研究，静岡大学教育学部研究報告教科教育学篇，第36号，149-160，2005.

9）田中秀幸，窪田辰政，渡瀬益章，山本　章：中学生の柔道に対する意識の研究（2），静岡大学教育学部研究報告教科教育学篇，第37号，99-111，2006.

10）田中秀幸，窪田辰政，渡瀬益章，山本　章，花村幹夫：中学生の柔道に対する意識の研究(3)，静岡大学教育学部研究報告教科教育学篇，第38号，2007.（印刷中）

11）松本芳三，川村禎三：各国柔道の実態調査，講道館柔道科学研究会紀要，第2輯，13-20，1963.

12）花田敬一，竹村　昭，藤善尚憲：スポーツマン的性格，不昧堂出版，175-244，1970.

13）尾形敬史，添田孝幸：柔道に対する意識の研究（第1報）－中学生を対象にして－，茨城大学教育学部紀要（教育科学），第28号，35-56，1979.

14）尾形敬史，深見則之：柔道に対する意識の研究（第2報）－高校生を対象にして－，茨城大学教育学部紀要（教育科学），第29号，45-63，1980.